戦時期朝鮮における思想犯統制と大和塾

洪　　宗郁

はじめに

苛酷な弾圧によって数多くの思想犯をつくり出した朝鮮総督府は、1930年代半ば以降、社会へ復帰する転向／非転向の思想犯を統制する必要に迫られた。戦時期朝鮮における思想犯統制は、日本帝国全体の治安維持法体制の一環として行われ、予防拘禁と保護観察をその両輪とした。予防拘禁は思想犯を社会から隔離することに主眼がおかれ、刑務所の延長ともいえる保護教導所が設けられた。他方、保護観察は社会のなかで思想犯を統制することを目指したため、保護観察所のほかに当局と社会を媒介すべき外郭団体を必要とした。1938年７月に結成された時局対応全鮮思想報国連盟と、これを改組する形で1941年４月に創立された大和塾が、その役割をはたした。

大和塾は朝鮮各地に教室、宿舎、授産施設などを備えた「道場」を設け、思想犯の「錬成」を行った。同時にさまざまな社会活動を展開したが、国語講習会の受講者だけで1944年までに３万名を越えるなど[1]、戦時期の朝鮮社会において大きな存在感を示した。大和塾の諸活動からは、植民地政府である朝鮮総督府が、思想犯統制の域を越え、社会全般に深く介入していく戦時期固有の状況を確認することができる。

戦時期の思想犯統制政策を含む植民地朝鮮における治安維持法体制については、水野直樹の一連の研究を通して全体の枠組みはもちろん細部の様態までを把握することができる[2]。朝鮮における保護観察と予防拘禁についてはそれぞれ池昇峻と黄敏湖の研究がある[3]。また大和塾については永島広紀の研究が参考になる[4]。本稿では、先行研究で用いられた資料に加え、朝鮮で保護観察を受けた大隅実山の資料などを活用し、保護観察と大和塾の実態に迫りたい。

第１章では、まず保護観察と予防拘禁について概観し、転向者団体である時局対応全鮮思想報国連盟の大和塾への改組過程を検討した後、大和塾の組織と施設を説明する。第２章では、大隅実山の日記に表われた大和塾での思想犯錬成の具体的な様相を紹介し、国語講習会などの社会活動が朝鮮社会に及ぼした影響について検討する。

---

* This work was supported by Research Resettlement Fund for the new faculty of Seoul National University.

1 『昭和二十年度 朝鮮年鑑』京城日報社、1944年10月、177頁。

2 水野直樹「戦時期朝鮮における治安政策―「思想浄化工作」と大和塾を中心に―」『歴史学研究』777、2003年、同「戦時期朝鮮の治安維持体制」倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争７ 支配と暴力』岩波書店、2006年、同「思想検事たちの「戦中」と「戦後」―植民地支配と思想検事―」松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版、2009年。

3 黄敏湖「戦時統制期朝鮮総督府の「思想犯」認識と統制」『史学研究』79、2005年９月、池昇峻「1930年代日帝の「思想犯」対策と社会主義者たちの転向論理」『中央史論』10・11合輯、1998年12月（いずれも朝鮮語）。

4 永島広紀「日本統治下の朝鮮における転向者と思想「善導」の構図」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』12巻２号、2008年１月（同『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、2011年、所収）。

1．戦時期朝鮮における思想犯統制

1）保護観察と予防拘禁

思想犯保護観察制度は治安維持法体制の一環として導入された。1925年４月に公布（５月施行）された治安維持法は、勅令によって植民地朝鮮でも施行された。1928年６月には緊急勅令による改正で「国体」変革に対する処罰の厳重化と「結社の目的遂行の為にする行為」に対する処罰規定が導入された。社会に復帰する思想犯を統制するために保護観察と予防拘禁を導入する改正案は、1934年２月と1935年３月に議会に提出されるが成立しなかった。その後、1936年５月に思想犯保護観察法が公布（11月施行）され、日本「内地」の22か所に保護観察所が設置された[5]。

1936年12月には朝鮮思想犯保護観察令が公布・施行され、朝鮮にも思想犯保護観察制度が導入された。朝鮮では京城、咸興、清津、平壌、新義州、大邱、光州の７か所に保護観察所が設置された。保護観察の対象は治安維持法違反の思想犯のなかで、起訴猶予者、執行猶予者、仮出獄者、満期釈放者であった。朝鮮では1936年10月現在、1928年以来治安維持法違反事件で検挙された者は16,000名を越え、そのなかで起訴猶予者・執行猶予者・仮出獄者・満期釈放者は6,383名に達した[6]。ここから対象者の規模が推測できる。たとえば京城保護観察所の保護対象（1928～1935年の間に処分を受けた者）は起訴猶予者328名、執行猶予者198名、満期釈放者608名、仮出獄者26名、合計1,160名であった[7]。

予防拘禁は、日本「内地」に先立ち、1941年２月に朝鮮思想犯予防拘禁令が公布され、３月から施行された。1941年３月には「内地」で予防拘禁の条項を含んだ改正治安維持法が公布（５月施行）されたので、朝鮮でも予防拘禁の法的根拠は改正治安維持法へと代わった。予防拘禁の規模は、1941年11月末に40名であり、1944年９月末の時点では、累計89名が予防拘禁に付され、退所などで30名が外されたため、59名が収容されていた[8]。朝鮮における予防拘禁制度の展開を要領よくまとめている『昭和二十年度 朝鮮年鑑』の記事を紹介したい。

> 尚行刑又は保護観察によつて詭激思想を清算せず再犯の虞れ顕著な非転向者に対しては、昭和一六年五月以降治安維持法の改正に伴ひ予防拘禁制度が全国的に実施せられ（朝鮮に於ては之に先ち朝鮮思想犯予防拘禁令を公布し同年三月実施した）、予防拘禁の機関として京城に（昭和十八年十二月青州邑に疎開す）朝鮮総督府保護教導所を設置し、彼等を社会から隔離すると共に強度の錬成を加へ、其の皇民化に不断の努力を続け漸次其の成果を示しつゝある[9]。

〈表１〉は戦時期朝鮮における思想犯統制の仕組みをまとめたものである。予防拘禁は思想犯統制の苛酷さを象徴するが、社会から隔離した場所で行われ、またその規模も大きくなかったため、社会に及ぼした影響に着目するならば、思想犯統制政策の核心は保護観察にあったと

---

[5] 奥平康弘『治安維持法小史』筑摩書房、1977年、参照。

[6] 法務局「朝鮮に於ける思想犯保護観察制度に就て」『司法協会雑誌』15（10）、1936年10月。

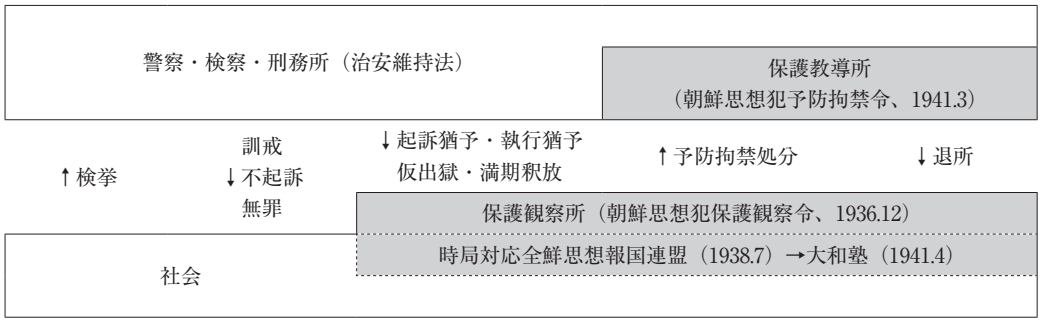
[7] 「京城保護観察所第一回嘱託保護司打合会（続）」『司法協会雑誌』16（11）、1937年11月。

[8] 朝鮮総督府法務局「昭和16年12月　第79回帝国議会説明資料」『朝鮮総督府　帝国議会説明資料　第５巻』不二出版、1994年、64～65頁、朝鮮総督府「昭和19年12月　第86回帝国議会説明資料」『朝鮮総督府　帝国議会説明資料　第10巻』不二出版、1994年、86頁。本資料の存在は水野直樹教授よりご教示いただいた。

[9] 前掲『昭和二十年度 朝鮮年鑑』177～178頁。

いえよう。

〈表１〉戦時期朝鮮における思想犯統制の仕組み



次に大隅実山の事例を通して保護観察の実態を見てみたい。僧侶である大隅実山（1904～2000年）は、戦前に新興佛教青年同盟事件で執行猶予の判決を受け保護観察に付された後、朝鮮に渡り大和塾に関係し、戦後は岡山で住職をしながら朝鮮人戦時動員被害者の遺骨の供養に尽力した人物である[10]。大隅実山は1937年12月に検挙され、1939年４月１日に執行猶予（懲役２年）の判決を受けて釈放されるが、保護観察の対象となる。保護観察の様子がわかる最初の資料は、大隅が金沢保護観察所の松岡保護司宛に作成した報告書である。報告書は全部で13枚あり、1939年５月４日～６月４日の行跡が詳細に記録されている。1939年８月には担当の保護司が変更となるが、「保護司栗原廣道ノ保護観察ニ付ス」という８月11日付の通知書が残っている。

その後大隅は、朝鮮の大邱にある光圀寺の住職・市田元弘師に勧められ、1940年の夏に「朝鮮布教助手」として朝鮮に渡り大邱に居住する。また同年12月からは京城の護圀寺にある日蓮宗朝鮮開教監督部で「布教助手」を務めることになる[11]。大隅の日記からは、1940年３月９日に「朝鮮より市田元弘師来山」し、６月25日には金沢を出発し、７月２日に大邱に到着したことが確認される。興味深いのは到着当日に大邱署特高を訪問し、翌日には大邱保護観察所を訪問し、到着を報告している事実である。その後大邱保護観察所より「大邱保護観察審査会ノ審議ヲ求メタリ」（1940年10月25日付）、「保護司日根野直芳ノ観察ニ付シ保護者市田元弘ニ引渡ス」（1940年11月５日付）の２通の通知書が届いた。転入先で保護観察審査会を開き、新しく保護司と保護者を定めて通知していたことがわかる。再び京城に住居を移す際も、同じく京城保護観察所より「保護者市田元弘ニ引渡処分ハ之ヲ取消ス（中略）本人ハ肩書住所ニ転住シ前記保護者ノ保護的立場事実上困難ナル地域ニ在住シタルニ由ル」という通知と「観察保護司変更通知ノ件（中略）妙心寺別院住職華山大義ニ変更」という通知が同じ1941年１月８日付で届いている。

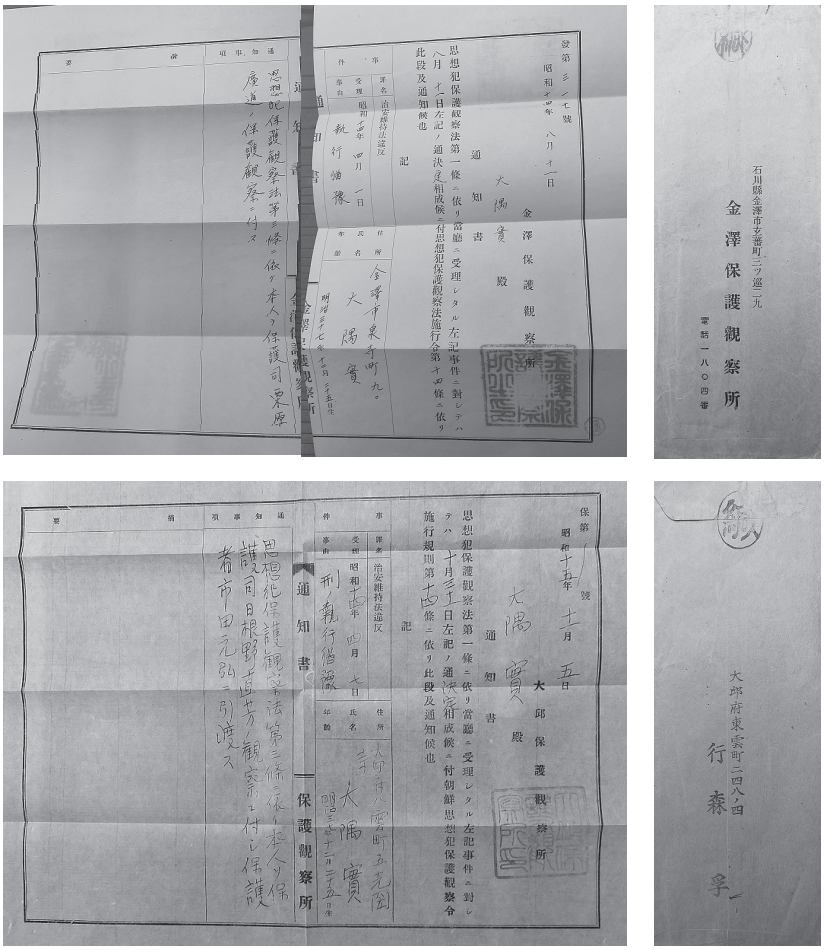
大隅は金沢、大邱、京城の保護観察所よりそれぞれ通知書をもらっているが、封筒に記載さ

---

[10] 大隅実山の資料は、ご遺族（岡山在住）のご厚意により閲覧・複写が可能となった。貴重な資料を大切に保管・整理されているご遺族と、調査の便宜をはかってくださった岡山商科大学の全円子教授に感謝する。大隅実山と大和塾との関係および大隅実山による朝鮮人遺骨の供養については、テレビドキュメンタリー「鏡の中の自画像―在日教師と94翁―」（岡山放送制作、1999年）と『友好の架け橋 part Ⅱ―韓国研修報告集―』（明誠学園高等学校社会部、1998年11月）を参照。

[11] 大隅実山（真城寺住職）「京城の嵐 戦前の朝鮮での思い出」『解放の道・岡山版』1982年９月15日。

れている発信者の情報に違いがある。金沢保護観察所よりの封筒には保護観察所と明記されているが（写真１上）、大邱と京城の場合は保護観察対象であることがわかる情報は一切ない（写真１下、行森孚は大邱保護観察所長）。当時朝鮮の雑誌記事では保護観察所の活動について「なにか調査することや聞くことがあるときは、封函手紙で本人に通知し、他人の目につくことがないようにするつもりだ」[12]と書いているが、大隅宛の通知書を通してその一端が確認できる。朝鮮での思想犯統制政策の中核として活躍した思想検事の長崎祐三は「意気揚々と出獄した半島の某共産主義者は「過去に於て思想犯で入獄せば出獄後嫁の候補は沢山あつたが、今は嫁に来て呉れる者は一人もない程度現時勢は変つた」と悲観して述懐した」[13]と述べたが、このような認識が上記の措置の背景になったと思われる。



〈写真１〉保護観察所の通知書（上）金沢（下）大邱

２）時局対応全鮮思想報国連盟から大和塾へ

朝鮮の転向者団体である時局対応全鮮思想報国連盟は、日本「内地」での動きと連動しなが

[12] 李鍾模「實施された思想保護觀察令」『朝光』３（６）、1937年６月（朝鮮語）。

[13] 長崎祐三「時局と半島転向者の将来」『昭徳』４、1939年11月。

ら結成された。1937年11月、「内地」では昭徳会の主導で全国の保護観察所から１名ずつ委員を出して暫定時局対策全国委員会を発起した[14]。「保護観察」に止まらず、転向者を「思想戦」へ動員することが目的であった。引き続き1938年６月20日には時局対応全国委員会が開催されるが、その場には朝鮮人転向者の朴英熙と権忠一が参加し、「内鮮一体強化に関する件」を「協議事項」として提出するなどの活動を展開した[15]。朝鮮では1938年７月３日に京城保護観察所で時局対応全国委員会参加報告会が開催された。その場で朝鮮各地より出席した転向者代表は「全鮮転向者の自主的組織結成の動議を可決」[16]し、その準備を進めた。やがて７月24日、総督代理、朝鮮軍司令官代理、高等法院検事長、各保護観察所長、７か所の保護観察所の「転向者代表」45名、「在京城思想事件関係者」など350名余りが参加したなか、時局対応全鮮思想報国連盟（以下「連盟」もしくは「思想報国連盟」と略す）の結成大会が開かれた[17]。

組織は、1939年12月現在、７支部63分会で2,765名の会員を擁し[18]、1940年末には７支部83分会で会員は3,300名に上った[19]。連盟への加入は転向を保障するものとして受け止められた。1938年９月、キリスト教系統の社会運動団体が標的とされた「興業倶楽部」事件の収拾のために開かれた尹致昊・申興雨・李春昊・兪億兼の会合では、事件関係者の国民精神総動員連盟・朝鮮防共協会・時局対応全鮮思想報国連盟への加入活動が決議された[20]。京城コムグループで活動していた権又成は、朴憲永と会った際、「実兄ノ勧誘ニ依リ朝鮮時局対応思想報国連盟馬山分会ニ加入シ其ノ幹事ニ不本意ナカラ選ラハレタ」と報告し、「形式的転向ノ反動性ヲ認識シテ居ナイカ」[21]と詰問された。このような情況であったため、「偽装転向」あるいは「逆転向」の可能性も常に存在した。当局は「中ニハ表面転向ヲ装ヒテ官憲ノ眼ヲ蔽ヒ或ハ社会ノ同情ヲ求メンカ為思想報国連盟ニ加盟スル等為ニセンカ為ノ転向ニ非スヤト観察セラルルモノアリ」[22]と警戒を緩めなかった。

連盟を朝鮮人の自主的組織にしようとする積極的な動きも存在した。連盟が発議の段階から「自主的組織」を目指したことは上述の通りだが、法務局の調査でも連盟について「全鮮思想転向者を打つて一丸とする強力なる自主的組織を形成せんことを目的とした」[23]と評価していた。連盟の規約でも「自主的社会復帰」を掲げており、創立宣言でも「消極的な自己清算より

---

[14]「【所報】暫定時局対策全国委員会」『国民思想』1938年７月。

[15]「暫定時局対応全国委員会概況」『昭徳会報』３（７）、1938年７月。

[16] 京城保護観察所『保護観察制度の概要 附 時局対応全鮮思想報国連盟の概要』1939年。

[17]「時局対応全鮮思想報国連盟結成式状況」『司法保護月報』５、1938年９月、「全鮮に燃え上る転向者赤誠の烽火 時局対応全鮮思想報国連盟結成さる」『昭徳会報』３（９）、1938年９月。

[18]「時局対応全鮮思想報国連盟一覧」時局対応全鮮思想報国連盟、1940年、24頁（一橋大学附属図書館所蔵）。

[19] 長崎祐三「思想犯保護観察の回顧」『朝鮮司法保護』１（２）、1941年12月、６頁。

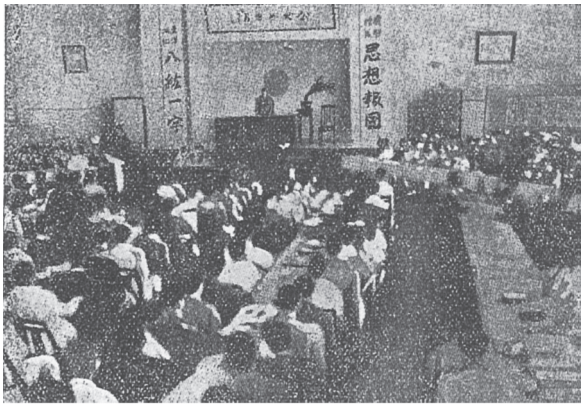
[20]「尹致昊ノ動静ニ関スル件」（京鍾警高秘第8273号の４、京城鍾路警察署長→京城地方法院検事正・京畿道警察部長・府内各警察署長、1938年９月15日）、「集会取締状況報告（通報）」（京鍾警高秘第8273号の５、京城鍾路警察署長→京城地方法院検事正・京畿道警察部長・府内各警察署長、1938年９月20日）、以上、韓国・国史編纂委員会所蔵『延禧専門学校同志会興業倶楽部関係報告』所収（同委員会ウェブサイトより）。

[21]「権又成被疑者訊問調書（第二回）」1941年３月28日、1095頁（韓国・国会図書館ウェブサイトより）。

[22] 朝鮮軍参謀部「昭和十四年前半期朝鮮思想運動概況」９頁（韓国・国会図書館ウェブサイトより）。

[23]「時局対応全鮮思想報国連盟の活動状況」『思想彙報』20、1939年９月、213～222頁。

積極的な自己完成へ進む」ことを標榜している[24]。日本の転向者もこのような側面に注目した。大量転向の口火を切ったことで有名な鍋山貞親は、1938年10月に朝鮮の雑誌『東洋之光』に掲載した文章で、「内地」の転向者と違って「半島の諸兄らが恰も半島全土を席巻するかの勢で英気颯爽と御活動なさつてゐることは敬服の至り」[25]と述べ、佐野学も同年11月の同誌で、「内地」の転向者が「積極性の欠けてゐる」のに対して「半島の共産党転向者が内鮮一体運動の先頭に立ち非常な能動性を示してをるのは全くいいことだ」[26]と評価した。



〈写真２〉時局対応全鮮思想報国連盟の結成大会[27]

結成大会の風景も興味深い。もともと「時局対応全鮮転向者連盟」として招集された会議であったが、一部の参加者より「転向とは新聞記者たちが共産主義者を揶揄する意味で作ったものであり、また転向者というと社会では前科者を連想」するという意見が強く、現場で名称が変わった[28]。結成大会の様子を収めた〈写真２〉によれば、演壇の両側にそれぞれ「八紘一宇」「思想報国」と書かれた大きな垂幕が掲げられていることが確認できる。「思想報国」という名称はこれに触発されたものかもしれない。大会に列席した日本人の転向者も「全鮮の同友諸君が熱烈な意見を吐露」した結果、名称が「転向者連盟」から「思想報国連盟」へと変更されたと伝えた[29]。臨席した法務局長の同意を得たとはいえ、当局が定めた組織名を結成大会の場で変えてしまったことになり、朝鮮人転向者たちの勢いが感じられる。緑旗連盟も「思想報国」について「積極性をもつた名」[30]と評価した。連盟の組織構成にも自主的運営の可能性が込められていた。本部の総務と支部の支部長には朝鮮人の名士・名望家が就き、日本人の各保護観察所長は総務次長や副支部長としてこれを補佐する体制であった。本部の幹事も朝鮮人の転向

---

[24] 前掲「全鮮に燃え上る転向者赤誠の烽火 時局対応全鮮思想報国連盟結成さる」５～６頁。

[25] 鍋山貞親「大兄らは恵まれてゐる」『東洋之光』1939年10月。

[26] 佐野学「内鮮一体の三大思想的眼目」『東洋之光』1939年11月。

[27] 前掲「全鮮に燃え上る転向者赤誠の烽火 時局対応全鮮思想報国連盟結成さる」３頁。

[28] 鄭三峯「全鮮転向者大会傍聴記 全朝鮮思想報国連盟結成！」『四海公論』４（９）、1938年９月（朝鮮語）。

[29] 岐阜・小島玄之「朝鮮の印象」『昭徳会報』３（９）、1938年９月、30頁。

[30] 緑旗日本文化研究所『今日の朝鮮問題講座（４）朝鮮思想界概観』緑旗連盟、1939年11月、42頁。

者が多数を占めていた。

〈表２〉時局対応全鮮思想報国連盟の構成（1940）

本部
〔総務〕李升雨
〔総務次長〕山下秀樹

（幹事会）
〔常任幹事〕栗田清造 横田伍一 宮本國忠 本多文映 金斗禎 兪億兼 金漢卿 張德秀 朴英熙

〔幹事〕朴得鉉 權忠一 韓相建 李寛求 崔斗善 印貞植 金桂林 沈浩燮 朱仁奎 葛弘基 尹致映 尹東鳴 崔益翰 羅俊英 閔丙曾 崔鉉培 具滋玉 趙基栞 廉仁傑 朴自甲 高明子 金俊淵（以上、京城府内。支部管内の幹事は省略）

	京城支部	咸興支部	清津支部	平壌支部	新義州支部	大邱支部	光州支部	
〔支部長〕	張友植	劉泰卨	張憲根	李基燦	高一清	徐丙朝	玄俊鎬	
〔副支部長〕	山下秀樹	香川愿	相良春雄	依田克己	長崎祐三	佐々木義久	松本孝義	〔計〕
〔分会〕	11	7	5	2	10	12	16	63
〔盟員〕	596	541	343	237	240	214	584	2765

＊前掲「時局対応全鮮思想報国連盟一覧」をもとに作成。盟員と分会は1939年12月現在。

転向者の自主的な動きは当局の警戒を招いた。新義州保護観察所長を経て大和塾の創立を主導した長崎祐三は、「連盟本部の幹事には転向者数名ありて、彼等は何時の間にか幹事会なるものを組織し、そこに於て転向者特有の実行不可能な抽象的実践事項を決議し、此の方面に経験のない民間人たる総務に之が実践方を採用せしめ、総務の名によつて各支部に其を指令し、支部に於ては副支部長たる保護観察所長は逆に転向者の決議したるものを実践すると云ふ珍現象が芽生えて来た」[31]と指摘した。結局、法務局長は幹事会の開催を厳禁する。あくまで連盟規約や組織図に則った運営だったが、当局には許されなかったのである。

「内地」と朝鮮を分けて考える差別的な認識もはっきりと現れた。長崎は、「内地」の転向者は共産主義者であるが、朝鮮の転向者は共産主義者のほか「国家主義的性質」を帯びている民族主義者もいるので、「内地」の委員会に倣って「連盟を転向者の自治に委かしたならば彼等は益々指導者意識を強め終に彼等は保護観察所の指導さへも拒否するに至る虞がある」[32]と警戒した。朝鮮人が首長となり日本人がこれを補佐する体制について、当局は日本人と朝鮮人の間でヒエラルヒーが転覆することを恐れたのである[33]。少し後のことだが、実は長崎自身も、大和塾の会長でありながら、国語講習会で講師を務めた日本人女性に「半島人」と誤解されたことがある。長崎は「失笑」[34]したと書いたが、植民者と被植民者の識別は、植民地統治の根

[31] 長崎祐三「思想犯保護観察の回顧」『朝鮮司法保護』１（２）、1941年12月。

[32] 長崎祐三「朝鮮における思想輔導の現況」『昭徳』８（８）、1943年８月。

[33] 水野直樹は戦時期朝鮮の映画を分析し、映画に描かれている「民族ヒエラルヒー」とその「転覆の可能性」を読み取っている（水野直樹教授退職記念講演会「戦時期朝鮮の社会を読む―植民地研究と映画―」、2016年３月17日、参照）。

[34] 長崎祐三「日本の娘」緑旗連盟編『大和塾日記』興亜文化出版株式会社、1944年６月。

幹にかかわる問題であった。

「積極」性自体も問題となる。長崎は「転向者が全く消極的態度を棄てて専ら新社会建設の戦士の如く振舞ふに至れば世人の同情は変じて反感となる」[35]と述べた。連盟みずからも積極的な活動が「政治」と見られることは警戒した。連盟発行の一覧に載っている「連盟の活動任務」には「連盟は政治に干与することなく、国家総動員運動に積極的に参加協力しなければならぬ」とし、「連盟は決して政党ではない」と規定した[36]。しかし、日中戦争期の朝鮮では、とくに1938年10月の「東亜新秩序声明」以降、予想される帝国秩序の変動下における朝鮮の地位をめぐって数多くの言説が出されていた。連盟関係者も積極的に論争に参加した。常任幹事の金漢卿は当時の内鮮一体運動の「方法論」を「民族同化論」と「民族協同論」に分けて、「「一体とは同化を意味する」という早急な常識的判断を離れ、現実の実在条件を具体的に捕捉することに努力する必要がある」[37]とし、民族協同論を支持した。幹事の印貞植も「内鮮一体というならば、朝鮮語の廃止・朝鮮衣服の禁用等を意味することだと思う、ああいう無智な徒輩こそ情けない人間」[38]であると述べ、総督府の立場とは距離を置いた。当局が転向者のこのような政治的な動きに不安を感じたことは間違いない。

朝鮮人転向者の自主的かつ積極的な振る舞いを恐れた当局は、思想犯を統制する新しい方式を模索する。その中心には新義州保護観察所長・長崎祐三がいた。大和塾の創立につながる新しい方式とは、イデオロギーではなく生活に重点を置くものであった。緑旗連盟が発行する『緑旗』に載った大和塾探訪記では「思想報国連盟には、まだまだ転向気分のぬけぬ、口先だけの者も多かった」といい、大和塾では「理論よりは実践を、形式よりは魂を、転向者のするどい魂の修練を行った」[39]と紹介した。総督府発行の雑誌『朝鮮』に掲載された大和塾訪問記でも「ここでは理論闘争は全然行はない。「行」一点張りである」、「理論闘争によって転向させやうとしてもそれは無理な注文だ。だからここでは「情」の生活より出発しつつ、日本精神を把握させることをモットーとする」[40]と説明している。

大和塾は、最初は思想報国連盟新義州支部が経営する「学院」の名称であった。新義州では、国境労働組合に夜学部を設置し、無償で無産児童を教えてきたが、増えてくる児童を収容するため、地方の有力者から寄付金を得て「学院」を新築した。そして1940年５月に竣工した同学院を大和塾と命名したのである[41]。さらに新義州では「住宅と教室と授産場とを具有する」[42]方式を導入したが、これは日本「内地」とは異なる朝鮮固有のやり方であった。このような新義州モデルが思想犯統制の新しい方式として朝鮮全体に広まり、同年12月には京城大和塾が開塾することになった[43]。そして1941年２月に長崎祐三の京城保護観察所長赴任とも相まって、朝鮮全体で思想報国連盟の解消と大和塾の発足という方向性が定まったのである。

---

[35] 長崎祐三前掲「思想犯保護観察の回顧」。

[36] 前掲「時局対応全鮮思想報国連盟一覧」７頁。

[37]「共同運命への結合と還元論」『三千里』12（３）、1940年３月（朝鮮語）。

[38]「時局 有志円卓会議」『三千里』11（１）、1939年１月（朝鮮語）。

[39]「のび行く若き半島の心 京城大和塾をみる」『緑旗』1941年10月。

[40] 沖中守夫「新義州大和塾訪問記」『朝鮮』325、1942年６月。

[41]『毎日新報』1940年４月28日、４面（以下、（ ）内に面数のみ記す）。

[42] 長崎祐三前掲「朝鮮における思想輔導の現況」。

[43]『毎日新報』1940年12月11日（２）。

3）大和塾の組織と施設

1941年４月17日、時局対応全鮮思想報国連盟の各支部はそれぞれ独立の財団法人○○大和塾として発足した[44]。財団法人の設立は連盟段階からの宿願であった[45]。財団法人光州大和塾の資料にもとづいて大和塾の組織と構成を見てみたい。まず、大和塾の会長には保護観察所長が就いた[46]。連盟に存在した民族ヒエラルヒー転覆の危険性を正したことになる。会員は「本会ノ趣旨ニ賛同シ本会ノ事業ニ奉仕協力セントスルモノニシテ所定ノ手続ヲ経タル者ヲ以テ通常会員トス」と定め、「但シ思想犯保護観察法所定ノ対象者ハ凡テ本会員トス」と規定した。通常会員の会費は年額１円であった。加入するためには申込書を提出しなければならなかったが、時局対応全鮮思想報国連盟の会員は加入の手続きが要らなかった[47]。また「会員ニシテ本塾内ニ起居スル者」を塾生と規定した。起居しなくても「本塾授産場ノ従業員」は塾生とみなされた。組織としては塾長１名と副塾長１名を置いた[48]。京城大和塾の例を見れば、保護観察所所属の保護司が塾長を務めた。

保護観察対象者であれば自動的に会員にさせられ、年１円の会費も課されたので、厳しい措置と言わざるを得ない。朝鮮共産党事件で投獄されたことがある金錣洙の回顧によれば、光州保護観察所より、思想報国連盟の会費14か月分の１円40銭だけ払えば、新設された予防拘禁所に入らなくてもいいと言われたが、断ったため「西大門刑務所に新設されたいわゆる予防拘禁所に収容された」という[49]。金錣洙はこれを1940年夏のことと記憶しているが、予防拘禁が始まったのは1941年であり、光州保護観察所の資料などによれば金の予防拘禁が確定したのは1941年10月である[50]。したがって実際は1941年の記憶違いであり、思想報国連盟ではなく大和塾のことであろう。会費の額も上述した大和塾の規定とほぼ一致する。

保護観察所と大和塾は一体となって運営された。『緑旗』に掲載された京城大和塾の記事には職員として「長崎さんの下に、中山元次、本多文映、斉賀七郎の三氏」が登場するが[51]、長崎は京城保護観察所長であり、残りの３名は『朝鮮総督府及所属官署職員録』（1941年）[52]に載っている京城保護観察所の保護司３名と一致する。中山は、他の資料では塾長の肩書で登場している[53]。法務局は1941年５月に各保護観察所長宛に大和塾の専任主事に保護司の職務を嘱託す

---

[44] 高原克己「大和塾の設立とその活動」『朝鮮』317、1941年10月。

[45] 前掲「時局対応全鮮思想報国連盟一覧」14頁。

[46]「財団法人光州大和塾寄付行為」『昭和十六年六月　財団法人光州大和塾要覧』（方基中編『日帝ファシズム期韓国社会資料集３―総督府の思想統制と転向―』ソンイン、2005年、所収）。

[47]「財団法人光州大和塾寄付行為施行細則」前掲『昭和十六年六月 財団法人光州大和塾要覧』。

[48]「財団法人光州大和塾生規定」前掲『昭和十六年六月 財団法人光州大和塾要覧』。

[49] 韓国精神文化研究院編『遅耘金錣洙』韓国精神文化研究院現代史研究所、1999年、31頁（朝鮮語）。

[50]「予防拘禁決定確定ニヨリ処分取消者表」『昭和十七年三月　提出書類　光州保護観察所』（前掲『日帝ファシズム期韓国社会資料集３』）、「昭和十六／二十年　予防拘禁執行原簿　大邱覆審法院検事局」（韓国・国家記録院ウェブサイトより）。

[51] 前掲「のび行く若き半島の心　京城大和塾をみる」。

[52]『朝鮮総督府及所属官署職員録』（韓国歴史情報統合システム・ウェブサイトより）。

[53]「不穏落書発見ニ関スル件」（京西高秘第3497号、京城西大門警察署長→京城地方法院検事正、1941年６月25日、韓国・国史編纂委員会所蔵「京城地方法院検事局文書」所収、同委員会ウェブサイトより）。

るという文書を送り、適任者の推薦を求めている[54]。実際に清津では「農民道場」計画と関連して水原農林専門学校助教授出身の石綿政治を専任主事として推薦し[55]、法務局の了承を得ている[56]。さらに大和塾は「保護団体」として指定された。朝鮮では従来、思想犯保護観察令施行規則に従って「京城救護会」ほか16団体を保護団体と指定し、保護事業を委託してきたが、1941年 7月に新しく7か所の大和塾が保護団体として指定を受けた[57]。それまで保護観察所―保護団体―思想報国連盟の体制で運営されてきたのが、この段階では大和塾を中心に一体化しているのが確認できる。長崎は、「官尊民卑」は「東洋人の特質」とし、「民間団体で成功したものは無い。連盟も官に於て指導すべきである」[58]と主張したことがある。大和塾の運営はこのような判断を具体化したものといえよう。

次は大和塾の施設を見てみたい。京城と平壌はキリスト教系学校の建物を転用した。京城大和塾は、当局より圧力を受けて1940年10月に休校に入った監理教神学校の校舎を使った[59]。「宏壮な四階建ての洋館」[60]について長崎は、「新しく設備することになればなかなかかういふ風には参りません」と誇らしげに言った[61]。尹致昊が申興雨から聞いて日記に書き留めた情報によると、建物の使用料は年4,800円であった[62]。当時新聞では「大同鉱業社社長・月城鍾萬（旧名・李鍾萬―引用者）氏の経済的支援」が大きかったと報道した[63]。平壌大和塾は1941年には金仁貞が無償で提供した仁貞図書館大講堂を使用していたが[64]、1942年、旧聖書学校の建物を利用して2か所の道場を設け、それぞれ瑞穂と清明と名づけた。1941年に聖書学校側に貸室を依頼した際は神聖な場所を理由に断われたが、1942年の秋に敵産管理人を通して建物を借りたという[65]。キリスト教から思想報国へと空間の性格が変容したことは、時代の変遷を如実に物語る。李光洙は、このような状況について「日本精神に対抗し兼ねての、西洋精神の敗退」と表現したことがある[66]。

他の地域でも既存建物の買収あるいは新築で対応している。咸興大和塾の場合、授産、国語

---

[54]「大和塾専任主事ニ対スル保護司ノ職務嘱託ノ件」（法務局長→各保護観察所長、1941年5月29日、韓国・国家記録院ウェブサイトより）。

[55]「大和塾専任主事ニ対スル保護司ノ職務嘱託ノ件」（保秘第71号、清津保護観察所長→法務局長、1941年8月28日、韓国・国家記録院ウェブサイトより）。

[56]「保護観察所保護司職務嘱託辞令案」（法務局長→各保護観察所長、1942年2月28日、韓国・国家記録院ウェブサイトより）。

[57]『毎日新報』1941年7月30日（2）、「朝鮮総督府告示 第1142号 朝鮮思想犯保護観察令施行規則第二条ノ規定ニ依リ左ノ保護団体ヲ指定ス」『朝鮮総督府官報』4355、1941年7月30日。

[58] 長崎祐三前掲「思想犯保護観察の回顧」。

[59] 李成森『監理教と神学大学史 監神大七〇周年記念 1975』韓国教育図書出版社、1977年、228・234頁（朝鮮語）。監理教神学校は竹添町（いまの忠正路）と冷泉町（いまの冷泉洞）の2か所にあったが、大和塾が使用したのは竹添町の校舎であった。監理教神学校は1941年6月に冷泉町の校舎で再開校する（『毎日新報』1941年5月31日（3））。

[60] 高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。

[61]「京城大和塾訪問記」『文教の朝鮮』1942年10月、28～29頁。

[62]『尹致昊日記 十一（韓国史料叢書第19集）』国史編纂委員会、361～362頁（1940年12月14日分）。

[63]『毎日新報』1940年12月15日（2）。

[64]『毎日新報』1941年6月6日（4）。

[65] 朱永渉「平壌大和塾」『国民文学』1943年1月、125～126頁。

[66] 香山光郎（李光洙）「行者」『文学界』1941年3月、81頁。

普及講習、講演、座談会などを行う「皇道修練道場」を市外に建築する計画であり[67]、1941年２月現在、基金７万円が集まり道場建設に着手する、という記事が確認される[68]。清津大和塾では1941年に国有地の貸し付けを申し込み、道場、職員宿舎、農家（９棟）のほか農場を備えた「農民道場」を造成する計画が推進された[69]。新義州は、長崎が保護観察所長として勤めながら大和塾モデルを作り上げた場所である。『朝鮮』掲載の同所訪問記によれば、運動場、授産施設、保護司住宅に神社まで備えた道場に塾生11家族が入居しており、これと別途に女学生の教育を担当する大和家庭塾も運営していたことが確認される[70]。大邱大和塾は「大峰丙朝（旧名・徐丙朝－引用者）氏ほか数氏から大額（ママ）の寄附」を受けて前大邱日報社の社屋を買収し、1941年７月に移転した[71]。光州大和塾は990坪の敷地に集会場、宿舎、社宅、倉庫、教室および授産施設など７棟の建物と園芸場を具備した[72]。

２．大和塾の活動と性格

１）思想犯の錬成

大和塾における思想犯の錬成は「収容されて授産事業に従事する対象者及其の家族」つまり長期入塾者向けの活動と「適宜適当な期間入塾せしめて軍隊式規律の下に不言実行の行的猛訓練を施し心身を鍛錬」[73]する、つまり短期入塾者向けの活動という二つの方向で行われた。ここでは後者の代表例として1941年３月10日～４月９日に京城大和塾で実施された第一回「皇道精神修練会」[74]をとりあげ、思想犯錬成の一端をうかがってみたい。〈表３〉は同修練会に参加した大隅実山が残した日記から当該部分を抜粋したものである。

〈表３〉大隅実山日記（1941年３月10日～４月９日）

3月10日（月）	午后五時、観察所へ参集。全員三十名、朝鮮神宮参拝の後、六時半頃大和塾に入る。第三班に編入。長崎所長より訓辞あり。七時半頃より華山大義師の禅学講話についで座禅の実習あり。相当くたびれた。
3月11日（火）	午前六時三十分起床、七時朝礼、ラヂオ体操、七時三十分朝食。以后適当の時間に出勤*。午后六時帰塾、点呼。六時半夕食、七時講義、九時座禅、十時就寝。以下毎日之をくり返す。（＊大隅は護国寺に、他の人はそれぞれの職場に）
3月16日（日）	今夜は各自家庭へ帰って*休息の時間を与へられた。（＊大隅は護国寺に帰った）
3月18日（火）	彼岸の入日。大和塾入一週間の感想を書き、中山塾長に提出。
3月21日（金）	午前中十時半迄塾の中外清除。午后六時より長崎所長の新ギ州より当所転任の歓迎会、並、横田保護司の教導所転任の送別会。参会者六十名、会費五十銭。
3月22日（土）	夕食の時スキヤキのご馳走になる。有志者のキフになるものである。

[67]『毎日新報』1941年１月17日（３）。

[68]『毎日新報』1941年２月18日（３）。

[69] 前掲「大和塾専任主事ニ対スル保護司ノ職務嘱託ノ件」。

[70] 沖中守夫前掲「新義州大和塾訪問記」。

[71]『毎日新報』1941年７月４日（４）。

[72] 前掲『昭和十六年六月　財団法人光州大和塾要覧』５～６頁。

[73] 高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。

[74]『毎日新報』1941年４月８日（３）、『毎日新報』1941年４月10日（２）。

3月23日（日）	新村の延喜【禧】専門学校■耕地を千坪余土作し、ネギとホーレン草をまく*。二里の往復で非常に疲労した。四時開【ママ】散。帰寺途中セブランス病院に李澤順【李順鐸】氏を見舞ふ。幸ひに経過良好なり。（＊大和塾での食料とするため）
3月24日（月）	結岸法要午后二時より。晩、大浦貫道氏の大師の十大求心について講話あり。九時十分より座禅。この頃は毎晩、妙心寺の相川氏来塾指導。なんとなく躯だるし。
3月25日（火）	志願兵訓練所見学の為六時起床。見学は都合により自分だけ行かない。高橋とか云ふ総督府の官吏の創案になる日本体操と云ふのを指導された。
3月26日（水）	黒田監督*より彼岸の手当として二円五十銭支給さる。大和塾入塾の為五円収入減である、いやそれ以上である。尤も精神的には高いものを得る事になるが。夜おそく下痢に悩む。（＊寺の監督）
3月27日（木）	午前一時半頃より数回に渡り下痢す、為に一日休養。大和塾での休養もよい。友松の「佛教人生観」真理弐月号をよむ。新聲【聞？】報導に依れば、朝鮮キリスト教の反日反戦の祈祷文を信徒配布して検挙せられてゐる。
3月28日（金）	昨日得度式を挙た者に新発■の山田さんより二円菓子料を受く。聖キリスト伝（詩集）一と詩集山田芳夫の「菊の歴史」を、又「新文化」セルパン改題四月号等購入。晩、カバ【蒲勳】少佐の満洲見聞についてと在満朝鮮人の問題に関係して今後の鮮人の行方と云ったものについて開陳あり。喉つまる様なものであった。
3月29日（土）	華山老師の禅話あり。十時行事終わり。華山老師の講話は本当にいいものである。我宗にあした人のないのをさびしく思ふ。
3月30日（日）	午前八時半全員出発、九時半頃新村着。直に農耕にかかり先日の約培【ママ】を一時半頃終了。延禧専門学校の食堂で白、李、今一人二班の人の心づくしの中食をいただく*。あまり喰ひすぎて夕食後迄もこまった。そして腹をこわしたらしい。晩、南総督の代理で近藤秘書官の視察、並、一席の訓話あり。九時三十分頃座禅に入る。（＊弁当が届く）
3月31日（月）	監督より今月分として十五円支給さる。トルストイ伝の第一巻を購入、五.〇〇也。今夜は寺でねる事が出来る。
4月1日（火）	三月分菓子目三十円あり。未決出所満二年の記念日である。その当時を回想してまことに感慨無量なり。もっとも意ギあらしめたい。京子さんへ発信。
4月2日（水）	総督府の大関氏より日本学に就いて講義を受く。新義州浄土宗の人で林霊法*君の先輩たる某氏が大和塾見学。新興仏青のその後につき聞かれた。之は思ひかけない事であった。下駄など購入。（＊新興仏教青年同盟の関係者）
4月3日（木）	祭日につき休仮【ママ】を与へられた。持参した荷物中の書籍の中より武尾（大邱）さんより借用の法ケ経要品講ギ等を取出す。三木清編の「現代哲学辞典」三.八〇を購入。古本の昭和国民読本を買ふ。
4月4日（金）	今夜の講師は朝鮮軍報道部少将の講話についで四五人の人達の間に意見の交換が行はれた。国民としての又は臣道実践と云ふ事の根本的なものは何かと云ふ問ひに対しては、皆答へ足らないものがあった。
4月5日（土）	書店に依頼してあった実用書道講座三冊とどく、一円八十銭也。夕食にはスキヤキを、香山光郎文士よりキソウあり、ご馳走になる。講演なし。各班思ひ思ひの時間をすごし、九時座禅に入る。明日仁川行の為種痘をなす。瀬戸医院より証明持たざる為、又せ■された。
4月6日（日）	午前五時五十分起床。毎日の行事を終り七時半の汽車で仁川理研を見学。次いで月尾島に遊び、潮湯をあび、中食を頂き、四時京城駅帰着。自家へ一泊を許さる。
4月7日（月）	晩、長崎所長の心づくしでウナギのカバ焼を頂く。
4月8日（火）	観察所主催の送別会。食後各自の入塾感想発表会あり。法院関係の人達及京日、朝鮮、毎新の記者列席。
4月9日（水）	朝礼後記念撮影。京日の為、別に班長が掃除の所をトル。九時頃退塾式挙行。各自帰途。晩、毎新の懇談会あり出席。

前掲『友好の架け橋 part Ⅱ―韓国研修報告集―』に掲載されている大隅本人による翻刻を参照した。＊は翻刻の際に大隅が付した注記。【　】は引用者の注記。■は判読不能。

金沢→大邱→京城と住居を移しつつ保護観察を受けていた大隅は、1941年２月26日に中山保護司（大和塾長）に呼び出され、京城保護観察所を訪問する。そこで「大和塾に三十名を選抜して身心タンレンの為三月十日より一ケ月間入所して貰いたい」と言われ、新任所長にも紹介された。新任所長はほかならぬ長崎祐三であった。唯一の日本人参加者であり僧侶でもあった大隅は、本人の錬成はもちろん他の参加者に対する座禅の指導などを期待されたと思われる。大隅は同修練会を「偽装転向者」のためのものと判断していた[75]。

３月10日に会員30名は朝鮮神宮を参拝した後、三班に分かれて入塾した。李光洙の書いた紹介記事によれば、第一班長は白南雲、第二班長は崔益翰、第三班長は張徳秀であった[76]。初日より「華山大義師」の指導の下で座禅の実習が行われた。華山大義は妙心寺京城別院の住職であり、当時大隅の「観察保護司」でもあった[77]。李光洙によれば「二日目、三日目は塾生中に大住（ママ）という僧侶の方がおり指導」したが、その翌日は「背が九尺」の「怖いお坊さん」が来たという。尹致昊の実弟であり、「興業倶楽部」事件で逮捕され起訴猶予処分を受けた尹致暎も、大和塾体験を語りながら「デブの日本の坊主が出てきて仏経を読み、しっかりしろといいながら冷水を頭に浴びせたりもした」[78]と回顧している。大隅は座禅の指導にあたった僧侶として「保護司の華山大義師、補教師として法弟の華山恵光師と相川師」を挙げている[79]。

入塾期間中は、毎日午前６時30分に起床し、７時に朝礼とラヂオ体操、７時30分に朝食、その後各自の職場に出勤した。李光洙は「大和塾国語講習所で教授する職分を受け持った人三四人以外はみんな職場へ」行ったと説明した。大隅の場合は護国寺へ行った。午後６時に帰塾と点呼、６時半に夕食、そして７時から講義が続いた。多様な講義が行われたが、なかでも朝鮮軍少佐であった朝鮮人の蒲勲（旧名・鄭勲）の話が印象深かったようである。大隅は「喉つまる様なものであった」と書き、李光洙も講義の内容を「かつての朝鮮のことを考えてみてください。同じ朝鮮人同士も反対党なら四族を滅さなかったのか。ところが反日本的思想を持つ朝鮮人を三十年が過ぎても生かしておくということは国家がいかに寛容であるかを示す証拠です」と引用・紹介した。そのほか李光洙は「中村（栄孝―引用者）編修官」の国史講話が三日間続いたと触れている。講義が終わってからは９時に座禅、10時に就寝という順序であった。

新村にある大和塾の農場にも２回動員されたが、３月23日には帰り道にセブランス病院に李順鐸の見舞いに行った。李順鐸は延禧専門学校商科の教員であったが、1938年に「赤色教授グループ」[80]として目をつけられ投獄された経験があった。李はいっしょに入塾していたが[81]、途中で体調を崩したようである。３月30日には作業後に延禧専門学校の食堂で白南雲、李順鐸などが準備した弁当を食べた。白南雲も延禧専門学校の教員であり、李順鐸と同じ事件で投獄されたことがある。白と李は上記の事件ですでに学校から追い出されたが、元教員であったため、昼食の便宜を得ることができたのだろう。修練会で第一班長も務めた白南雲は後日提出した感

---

[75] ２月26日の日記では「~~思想犯予防拘禁令■■偽装転向のうたがい有ると見せ■~~」（■は判読不能）と当該部分を自ら消している。戦後の回顧では「偽装転向者」のための練成会だったと明確に述べている。大隅実山前掲「京城の嵐　戦前の朝鮮での思い出」参照。

[76] 香山光郎「大和塾修養会雑記」『新時代』４、1941年４月（朝鮮語）。

[77] 前掲京城保護観察所より大隅宛の通知書（1941年１月８日付）。

[78] 尹致暎『東山回顧録―尹致暎の20世紀―』サムソン出版社、1991年、137頁（朝鮮語）。

[79] 大隅実山前掲「京城の嵐 戦前の朝鮮での思い出」。

[80] 拙稿「植民地アカデミズムの陰、知識人の転向」『SAI』11、2011年11月、112頁（朝鮮語）。

[81] 香山光郎前掲「大和塾修養会雑記」。

想文で、「世人ハ或ハ規律ヲ拘束トノミ曲解スルカモ知レナイカ自ラ喜ンテ制約サレル処ニ法悦ノ世界カ展開サレルノヲ体認サレタノテアル」[82]と書いている。白南雲は大和塾で行った講演をもとに、『東洋之光』1942年６月号に「統制経済の倫理性」という論考を発表した。ただし、いわゆる転向者として積極的に活動した形跡はない。解放直後に出された書物『親日派群像』でも、白とほかの二人について「大和塾の仕事を手伝っているということで、それぞれ誘惑や威嚇を受けながら、国民総力連盟の副課長などの地位を巧妙かつ断固として排斥し」[83]と肯定的に評価している。

〈写真３〉第１回皇道精神修練会の参加者（大隅実山遺族所蔵）[84]

李光洙が座禅を指導していた大隅に触れたことは上述の通りだが、二人は修練会終了後もしばらく関係を保っていた。大隅日記には、1941年５月10日に「香山（李光洙の創氏－引用者）氏に案内され東大門外開運寺、大円庵、清涼寺等を見学」などの記述がある。大隅は５月22日に「内地」に帰るが、その後も11月20日に「香山氏ら無罪判決」で「御祝のハガキを投ず」、

---

[82]「大和塾第一回思想善導講習会受講生ノ感想内査ニ関スル件」（京高特秘第966号、京畿道警察部長→京城地方法院検事正・京城保護観察所長など、1941年４月18日、韓国・国史編纂委員会所蔵「京城地方法院検事局文書」所収、同委員会ウェブサイトより）。４月30日付の大隅日記にも「大和塾退塾の感想を書く」という記述がある。

[83] 民族政経文化研究所編『親日派群像』1948年〔『親日派罪状記』1993年、所収〕354頁（朝鮮語）。

[84] 名前が特定できる人物は次の通りである。前列右から１人目張徳秀、３人目白南雲、５人目李光洙、６人目長崎祐三、第２列左から２人目金南天、第３列右から２人目大隅実山（黒いコート）。

12月４日には「先便の祝意に対する返信あり」など文通は続いた。また戦後の回顧では、当時李光洙は「朝鮮と日本は仏教徒として手を取り合える」と言ったと伝えている[85]。李光洙は修練会の紹介記事で「第一回修養会が終わり、続けてほかの人員で第二回、第三回のように反復する予定だそうです。暫くは保護観察に付された人だけを訓練するが、将来は必ずしもこれに限らないだろうといいます。知識階級全体をこのように訓練する考えだそうです」[86]と書いている。実際に　４月29日～５月16日の日程で、第二回修練会が開かれた。５月16日の修了式には大隅も参加している。しかし、類似した形式の修練会はこれ以上は開催されなかった。〈写真３〉は第１回修練会参加者の写真である。上で触れた人物以外には文学者の金南天の参加が確認される[87]。

大和塾の他の事業としては1941年５月の扶餘神宮御造営勤労奉仕隊が目立つ。張徳秀を奉仕隊員代表とし、長崎京城保護観察所長の引率の下で、全７か所の大和塾塾生代表90余名が一週間の日程で扶餘を訪問し、「勤労奉仕」に臨んだ[88]。新聞には「みんな社会的地位が相当な方だが、ここではあくまでも純朴なひとりの奉仕作業者の忠誠なるこころ一つで最善を尽くすのみ」[89]と紹介された。終了後の６月１日からは献金募集があり、12月13日に1,228円70銭を扶餘神宮奉賛会に献納した[90]。1941年12月14日には京城保護観察所に塾生350名が参集し、大和塾誕生１周年記念式を兼ねた宣戦布告詔書奉読式を行った。長崎所長の訓辞の後に、塾生を代表して張徳秀、白南雲、印貞植の三名の答辞があり、作曲家・玄済明の伴奏で軍歌を斉唱した[91]。事前の新聞記事には「出席する塾生は金50銭ずつ持参するように願う」[92]という案内があった。会費の他にこのような献金などの負担も少なくなかっただろう。1942年11月中旬には一週間の日程で特別練成会が行われた。徴兵制実施をひかえて、朝鮮司法保護協会では全７か所の大和塾から模範的な塾生70名を選抜し、軍事講演・軍事訓練・兵営および訓練所視察などを実施した。代表は印貞植（日本名・桐生一雄）であり、練成会終了後に43円を集めて軍愛国部に献金した[93]。上述した光州大和塾の規定では塾に起居する者を塾生と呼んだが、上記の記事での塾生は会員と同じ意味で使われているように見える。

最後に清津大和塾の「農民道場」計画を通して、長期入塾の実態の一端をのぞいてみたい。農民道場の目標は「咸鏡北道ニ居住スル思想犯前科者ノ心身ヲ鍛錬シ農業ヲ通シテ皇道日本ノ真髄ヲ把握セシメ天皇帰一ノ信念及実力ヲ啓培シ咸鏡北道ノ思想浄化ト農村振興ニ挺身寄与スベキ中堅人物ヲ養成シ思想報国ノ大精神ヲ顕現スル」ことにあった。規模は「道内各郡ヨリ選出セル思想転向者ニシテ妻帯セル者六戸」、「別ニ短期訓練生トシテ思想転向者又ハ準転向者タル者一期三十名」、そして「全体ヲ統一スル主事一名」であった。入塾期間は「普通訓練農家」の場合、「毎年三月ヨリ翌年三月迄十三ケ月間」であり、「短期訓練生」は「各二ケ月ヲ一期」

---

[85] 大隅実山前掲「京城の嵐 戦前の朝鮮での思い出」。

[86] 香山光郎前掲「大和塾修養会雑記」。

[87] 良淑生「文壇往来」『内鮮一体』1941年６月。

[88]『毎日新報』1941年５月22日（３）、『毎日新報』1941年５月22日（３）。

[89]『毎日新報』1941年５月26日（２）。

[90]『毎日新報』1941年12月16日（２）。

[91]『毎日新報』1941年12月15日（２）。

[92]『毎日新報』1941年12月12日（２）。

[93]『毎日新報』1942年11月29日（３）。

とした[94]。規模や期間などに違いはあるものの、思想犯を長期にわたって起居あるいは通勤させながら、農業や他の授産に従事させる方式は、全ての大和塾で共通に実施されたと考えられる。

2）国語講習会と授産

国語講習会は大和塾を代表する一大事業であった。それまで矯風会に委託していた京城保護観察所の国語講習会が大和塾に移管されるなど[95]、大和塾は思想報国連盟や他の団体で運営していた国語講習会を引き継いで大幅に拡大した。これは長崎祐三の信念に支えられた側面がある。300名余りの犠牲者を出した1937年の白白教事件の主任検事であった長崎は、「朝鮮人は国語が出来ないから、無知であり、惨酷な犯罪を犯す。国語を話すことをよろこばぬものは悪い思想のもち主である」[96]と考えていた。同時に長崎は「転向者が教壇に立ち未就学者に国語を教授することによつて自己を修養しつつ国恩の万一に報ずる」[97]という効果も狙った。つまり、国語講習会を通して思想犯の錬成と国語の普及という二つの目的を達成しようとしたのである。1939年４月に思想報国連盟新義州支部から思想犯を国語講習会の講師とするモデルが出来上がり[98]、大和塾の創立と相まって朝鮮全体に拡大した。京城大和塾の主任である金光芳雄は「なんの実践もなく半島民衆の皇国臣民化運動を理論化して表面でのみ騒ぐいわゆる理論主義者たちと時局ブローカーたちを排撃する」とし、「内鮮一体論も理論を離れ実践的に入って積極的な進展をみることになり、内鮮一体はまず国語解得というモットーで全鮮で国語解得運動をおこし、国語講習会を開催」することになったと説明した[99]。国語講習会は、「理論」より「実践」という大和塾の理念を象徴する事業であった。

国語講習会の実態を見てみたい。まず竹添町の京城大和塾では午前、午後、夜の三部に分かれ、午前は国語を「相当にわかっている十二、三歳の大きな子供達」に、午後は「土幕民の子供たち」を含めて「国語のちっともわからない八、九歳の子供たち」に、夜は「職工や女中や家庭婦人を混へている二百名位」に国語を教えた[100]。「講師は皆京城大和塾の会員」であった[101]。京城ではここを始めとして府内８か所で国語講習会が開かれ、1941年10月現在、計2,000名の受講者があった[102]。これに水原、開城、平澤、大田各１か所を加えて、京城大和塾管轄の国語講習所は計12か所に上った[103]。たとえば「開城大和塾」では ６か月課程の国語講習会を運営し、1941年４月現在、すでに第１期講習生110名が修了し、第２期生150名が受講してい

---

[94] 前掲「大和塾専任主事ニ対スル保護司ノ職務嘱託ノ件」。

[95] 津田節子「はしがき―浅野さんを想ふ―」緑旗連盟編『大和塾日記』興亜文化出版株式会社、1944年６月。

[96] 長崎祐三「大和塾の国語教育」『緑旗』1942年６月。

[97] 長崎祐三前掲「朝鮮における思想輔導の現況」。

[98] 高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。

[99] 『毎日新報』1941年７月17日（４）。

[100] 前掲「のび行く若き半島の心 京城大和塾をみる」。

[101] 「国語普及 現地報告：小山元昭 平壌大和塾」『国民文学』1943年１月、123頁。

[102] 前掲「のび行く若き半島の心 京城大和塾をみる」。

[103] 高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。

た[104]。

1941年６月には数日おきに、京城大和塾の講堂で管内国語講習会の講師会議（約40名参加）が開かれ、延禧専門学校の運動場では国語講習会「第三部」第一回卒業記念園遊会および運動会（120名参加）が開かれ、講堂で国語講習会の第一回卒業式（卒業生は100名）が開催された。また受講生たちは街頭に出て正午黙禱を奨励し、廃品回収運動も繰り広げた[105]。まるで正規学校のように組織的かつ体系的に動いていたことがわかる。1942年６月には、料理屋の店員など夜に働く人々のために、17歳から35歳までの青年50名を対象に昼間部を設け、１年課程で国語のほか算術、国史、地理、音楽などを教えた。また徴兵適齢者のみを対象にする夜間部の国語講習会も開始した[106]。1942年５月に徴兵制の実施が公布されたことを受けた措置であった。社会教育機関としての性格を強化すると同時に、徴兵制の実施という時局の要請に応えようとする様子がうかがえる。

平壌では思想報国連盟平壌支部の時代である1940年６月10日に市内明星学校で第１回国語講習会が開かれた。10歳以上の男女50名に国語、算術、修身を教え、別途に公民科を置いて小学校卒業課程の男子も受け入れた。期間は６か月で、毎日夜８時から２時間の授業をし、12月10日に第１回の卒業生を送り出した。大和塾の創立後は、仁貞図書館講堂を借りて大和塾国語講習所を開き、15歳以上の男女各50名に１年かけて毎日夜７時から９時まで国語のみを教えた。1943年現在、第５回の受講生100名が授業を受けており、すでに男女約500名の卒業生を数えた。新しく開設した清明道場の第１回講習は1942年10月12日から始まった。徴兵適齢を目前にした青少年約100名が対象であり、毎晩７時半から９時半まで授業を行った。期間は６か月であり、教材は朝鮮総督府発行の国語教本を使用した[107]。平壌管轄の海州でも、思想報国連盟海州支部の時代である1940年７月から、「家庭婦人」および家庭の事情で小学教育を受けられなかった婦女に国語を講習した。講習期間は１年で、1941年までに２回の修了生80名を輩出した[108]。

新義州大和塾は20坪の教場２室を設け、男子班と婦人班で１室ずつ使用した。1942年６月現在、午前は星組が120名、菊組が112名、昼は梅組が123名、桜組が96名、夜は松組が120名、竹組が96名で、合わせて668名（667名？－引用者）であり、府内のほかの事務室で教えている60名を加えると全体の受講者は700名を越えた。国語のほかに算術、手工、唱歌、遊戯なども教えており、教師は塾生で無報酬であった。授業年限は２年であるが、この講習会を卒業すれば国民学校４年生に相当する学力を身につけることができるとされた。1940年１月15日から始まり、1942年に第１回の卒業生を送り出したが、なかには国民学校の５年生に検定編入された者もいた[109]。

そのほか光州大和塾では国語を習得していない15歳以上30歳未満の婦女に対して毎晩２時間の夜間講習を開いた。受講者は市内幼稚園で60名、大和塾内で60名に達し、会員が教師を務めた[110]。清津大和塾でも1941年６月から「社会事業の初頭として」「盲目（文盲のことか―引用者）

---

[104]『毎日新報』1941年４月25日（３）。

[105]『毎日新報』1941年６月13日（２）。

[106]『毎日新報』1942年６月25日（２）。

[107]「国語普及 現地報告：朱永渉 平壌大和塾」『国民文学』1943年１月、125～126頁。

[108]『毎日新報』1942年８月15日（４）。

[109]『毎日新報』1942年４月24日（２）、沖中守夫前掲「新義州大和塾訪問記」。

[110]前掲『昭和十六年六月 財団法人光州大和塾要覧』12～13頁。

の婦女を集めて、無料で国語講習会」を開いた。募集人員は100名で、資格は15歳以上の婦女であった[111]。

1941年10月現在、大和塾の国語講習会全体の規模は、京城大和塾は12か所で2,094名、咸興は２か所で140名、清津は１か所で160名、平壌は２か所で254名、新義州は７か所で1,172名、大邱は１か所で100名、光州は３か所で250名、計28か所で4,170名であった。また1941年８月20日現在、国語講習会を修了した者は2,000名に及んでいた[112]。『昭和二十年度 朝鮮年鑑』では、大和塾国語講習会での５年間の受講者は３万を越えたとされている[113]。さらに長崎は1942年に『緑旗』に寄稿した記事で、大和塾の国語講習会のために国民学校の施設を開放することを提案している[114]。朝鮮人の国民学校就学率が十分ではない状況で、大和塾を補助的な国民教育機関として運営する意図を持っていたことがわかる。雑誌『国民文学』では1943年１月号と２月号で「国語普及現地報告」を掲載したが、記事で取り上げた場所は「全州券番」「全州完山国民学校」「京城大和塾」「平壌大和塾」「咸南永興」「桃源国民学校」であった。総督府の国語普及政策において大和塾が占めている比重を推し測ることができる。

国語講習会とともに大和塾を特徴づける二大事業の１つは授産であった[115]。京城大和塾では応用美術看板ポスターの作成、紙函の製造、名刺の印刷を行った。光州大和塾では洋裁、新義州大和塾では折箱や割箸、薄板の製造などが行われた。土地を確保して農業を営む試みもあった。光州大和塾では塾内に養蜂、椎茸、薬草、蔬菜などの栽培場を設けた。清津大和塾では上述した通りに農民道場の設立を進めた。京城大和塾でも当時としては郊外にあたる新村で4,000坪の畑を耕作して蔬菜を栽培した[116]。短期入塾した大隅などがここの農作業に動員されたのは上述の通りである。授産は「自己の経営によって利潤をあげ、その利潤によって貧しき朝鮮同胞を教育する」という理念のもとで行われ、「資本主義的なカラクリは全く存在しない」という説明のように、戦時期における統制経済の思想に結び付けられた[117]。『昭和二十年度 朝鮮年鑑』では、大和塾の授産の全体規模について「投資額は一七〇〇万円、生産品年額三六〇〇万円、従業者千百余名に及んでゐる」と把握している[118]。

３）社会活動

大和塾は朝鮮社会に向けた講演会や座談会を開催し、宿舎などの施設を利用した合宿研修も多数企画した。1941年２月には京城大和塾で皇道学会主催の第１回「日本精神修道講習会」が開催され、津田節子を中心に婦人座談会などもその一環として開かれた[119]。1941年７月には平壌大和塾と平壌保護観察所の共催で「支那事変四周年記念大講演会」が開かれた[120]。1942年４

---

[111]『毎日新報』1941年６月15日（４）。
[112]高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。
[113]前掲『昭和二十年度 朝鮮年鑑』177頁。
[114]長崎祐三前掲「大和塾の国語教育」。
[115]『毎日新報』1941年７月10日（４）。
[116]高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。
[117]沖中守夫前掲「新義州大和塾訪問記」。
[118]前掲『昭和二十年度 朝鮮年鑑』177頁。
[119]『毎日新報』1941年２月７日（２）。
[120]『毎日新報』1941年７月５日（３）。

月23日から１か月間は、大和塾主催・毎日新報社後援で、日本精神博覧会がソウルの奨忠壇で開かれた。建国館、宝物館、武勲館、銃後婦人館、大和塾館など10個の陳列館が設置され[121]、毎日の平均入場者は5,000名（入場料大人50銭）[122]の盛況と報じられた。1943年６月には兵営見学団が、京城大和塾を宿所にしつつ講演会・兵営体験に参加した[123]。このほか大和塾の施設は総督府内部の研修にも使われた。1941年７月には４日間の日程で、検事局徴収主任練成会が京城大和塾で開かれた。法務局、京城、平壌、大邱より集まった75名が合宿をしながら、長崎観察所長の講演を聞き、妙心寺の華山大義より座禅の指導を受けた[124]。

大和塾の活動で特筆すべきものは女性教育に対する関心である。上述した国語講習会の実態でも女性に対する考慮が確認される。平壌では男女を同じ比率で募集し、新義州でも男女班を均等に１室ずつ運営した。とくに清津、光州、海州などでは女性のみを対象にしていたので、大和塾国語講習会の全体受講者では女性の比重がより大きかったと考えられる。実際にも長崎は「いままで無視された女性の教育」[125]と表現して、積極的な関心を示した。1941年現在、学齢人口の国民学校就学率は、男性64.3％に対して女性は26.5％に止まっていた。女性の「不就学」[126]が目立つなか、大和塾の国語講習会は公教育のジェンダー的非対称性を補完する役割を自任していたのである。

国語講習会では多数の女性教師が活躍した。緑旗連盟婦人部員８名は毎週月曜日に京城大和塾を訪れ、「図画や手工やお話等の情操教育から、お行儀や、よい躾」[127]を教えた。時局美談の類ではあるが、「実業家の令嬢」と紹介された金載璟（日本名・山本和）が、女学校卒業後、大和塾の使命に感激し、教師を志願したのみならず、報酬を断ったことは新聞や雑誌で何度も取り上げられた[128]。新義州大和塾では国語講習会とは別途に「大和家庭塾」を運営した。1941年７月に「小学校を卒へた未婚の半島婦人」45名が入塾し、高等女学校教諭の資格を持つ日本人女性の専任講師三名から指導を受けた[129]。修業年限は１年であった。教育の目標は「純日本人的生活様式を塾生の頭にしみ込ませそれから自然に日本人的な物の考へ方や観方にもつて来よう」というところにあった[130]。そのほか平壌大和塾では1942年２月に戦時下で家庭婦人の啓発運動を徹底するために婦人大講演会を開催し[131]、京城大和塾では1943年３月にキリスト教婦人代表90名の練成会を開催するなど[132]、女性を対象にした活動を繰り広げた。

社会福祉についての関心も目立つ。京城大和塾は1940年12月に監理教神学校の建物を引き継

---

[121]『毎日新報』1942年４月３日（２）。

[122]『毎日新報』1942年５月９日（２）。

[123]『毎日新報』1943年６月15日（３）。

[124]「昭和十八年七月　検事局徴収主任会同関係綴　法務局刑事課」（韓国・国家記録院ウェブサイトより）。

[125]長崎祐三前掲「大和塾の国語教育」。

[126]金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー―就学・不就学をめぐる権力関係―』世織書房、2005年。

[127]前掲「のび行く若き半島の心 京城大和塾をみる」。

[128]金載璟「京城大和塾女教師―一週間の手記―」『三千里』13（９）、1941年９月、前掲「のび行く若き半島の心 京城大和塾をみる」。

[129]高原克己前掲「大和塾の設立とその活動」。

[130]沖中守夫前掲「新義州大和塾訪問記」。

[131]『毎日新報』1942年２月23日（３）。

[132]『毎日新報』1943年３月４日（３）。

いだ際に「不遇の老幼者を保護育英」するための「大和保養院」を同時に開設した[133]。保養院の開設には大森世権（不明―引用者）氏の支援があったと報道された[134]。国語講習会を紹介する記事では、授業料が無料で学用品も無償で提供されていることを重ねて強調した。とくに京城大和塾の国語講習会の場合、「土幕民の子供」など「貧しくて学校に行けない子供達」が多数参加していたことが、講師たちの手記から分かる[135]。京城大和塾仁川支部では1943年５月に貧困者や労働者のために大和塾実費医院を設置した[136]。また京城大和塾では1943年11月に林孝貞（日本名・大山盛子）を主事として、託児所を設置した。託児所は昼間に限って無料で運営されたが、「勤労婦人層に朗報」[137]と宣伝された。男性労働力の逼迫を受けて叫ばれた女性の一定程度の社会進出の促進という、総力戦期の国家的要請に応える措置であった。

大和塾と文化人の合作あるいは癒着も興味深い。活動の場を求める文化人と戦時動員や国民化のための宣伝メディアを必要とする当局の意図が一致した結果であった。

音楽部門から見てみたい。1941年11月には大和塾主催の「国民音楽の夕べ」が府民館で開かれた[138]。植民地朝鮮を代表する音楽家たちであり、解放後に韓国の音楽界を牛耳ることになる玄済明、桂貞植、金慈璟などが出演した。当日の収入は大和塾に寄付された。その後も大和塾は「国民音楽の夕べ」を続けて開催している[139]。1943年４月には玄済明（日本名・玄山済明）の主導で大和塾内に京城音楽研究院が開設され、演習室と楽器を完備し、新進の指導にあたった[140]。1942年５月に結成された京城厚生楽団も時を同じくして大和塾に事務所を移転した[141]。京城音楽研究院は解放後に京城音楽学校に改称した後、ソウル大学校音楽大学へと改組された。ソウル大学校音楽大学の初代学長は玄済明であった[142]。植民地朝鮮の「国民音楽」の行方を考えるうえで興味深い事例である。

演劇部門では、京城大和塾主催・毎日新報社後援・現代劇場出演で、1942年４月に京城府民館で上演された「北進隊」が注目に値する。日露戦争期に日本を助け鉄道敷設作業に参加した一進会のことをとりあげた演劇であったが、公演のパンフレット[143]には釈尾東邦が一進会の会長・李容九を称える文章を寄せている。京城大和塾会長・長崎祐三は「この劇を世に送り、大方諸賢と共に内鮮一体の先覚者の霊をなぐさめたい」という文章を掲載した。現代劇場代表・柳致真は、国民演劇研究所の研究生募集から始まった現代劇場の１年間の活動を振りかえり、「もつとも多彩なる演劇を試み従来やゝもすると概念に捉はれ勝であつた国民演劇のより広い分野に開拓の鍬をさし入れ」たいという決意を明らかにした。演出を務めた朱永渉は後日「素朴な写実主義ないし自然主義」ではなく「真の写実主義を基調とし構成的・力学的・浪漫的面

---

[133]『毎日新報』1940年12月11日（２）。

[134]『毎日新報』1940年12月15日（２）。

[135]中津川郁子「大和塾のこどもと共に」『緑旗』1942年４月。

[136]『毎日新報』1943年５月14日（３）。

[137]『毎日新報』1943年11月８日（２）。

[138]『毎日新報』1941年11月９日（２）。

[139]桂貞植「大衆の健全娯楽希求、多彩な11、12月中の音楽会」『朝光』1942年２月、78～79頁。

[140]『毎日新報』1943年３月13日（２）。

[141]『毎日新報』1943年４月27日（２）。

[142]『ソウル大学校音楽大学50年史 1946-1996』ソウル大学校音楽大学、1997年、２頁（朝鮮語）。

[143]演劇「北進隊」パンフレット（全14頁、韓国・独立記念館所蔵）。

を吸収」したところに「国民演劇のひとつの性格」があると主張した。また、1943年６月には平壌大和塾付設「清明劇団」が、平壌出身の朱永渉などを中心として創立された[144]。劇団名は平壌大和塾の「清明道場」に因んだものと考えられる。

美術は京城大和塾の美術部が中心となって授産事業との関連で進められた。美術部には彫刻科、工芸科、肖像画科、図案科が設置されたが、とくに彫刻科が金属類献納運動によって徴発された銅像の代用品制作で活気を帯びた[145]。セメントやマグネシウムなどの材料を利用した金属代用看板作りも進められ、1942年の京城商工奨励館主催の代用品展覧会で受賞したことを受けて、各地方に特約店を設置し、積極的に工業化を図った[146]。彫刻科主任の尹孝重（日本名・伊東孝重）は、培材中学校と進明高等女学校での教員の傍ら、大和塾で金属代用品の開発や美術の指導にあたった。とくに尹孝重は、大和塾のアトリエで制作した「弦鳴」という作品で1944年の朝鮮美術展覧会で特選に選ばれた。「弦鳴」は朝鮮服を着て弓を射る女性の全身像であり、戦争と女性の社会進出という社会像を形象化した作品であった。尹は「時局の進展によって朝鮮の女性たちが各方面で溌剌な活動を行っているので、その姿を、そしてあわせて朝鮮衣服の美を表現」したと述べた[147]。この作品は、解放後に韓国の中高の美術教科書に載るなど、韓国美術の代表的な成果と見なされた。尹孝重自身も李承晩大統領の胸像を制作するなど、韓国社会で大きく活躍した。

他方、映画に関しては俳優たちの短期の入塾が確認される程度である。朝鮮映画会社は新たに募集した演技研究生12名を1941年12月に京城大和塾に入塾させ「征戦下の映画人として皇国臣民になる精神的訓練を受ける」ことにした[148]。期間は１週間であった。また大和塾は、1942年７月、軍報道部の後援を得て石井漠の「国民舞踊」公演を主催した。京城府民館で３日間公演し、その後地方を巡回する日程であった[149]。文学関連では、1943年４月に金龍済（日本名・金村龍済）の『亜細亜詩集』（大東文化社、1942）に対して京城大和塾から「模範思想戦士表彰」が授与された[150]。金龍済は、国語講習会の講師を務めながら亡くなった浅野茂子を偲ぶために刊行された『大和塾日記』（1944年）にも、追悼の詩「鐘」を寄せた[151]。

以上のように、国語講習会、授産、文化人との合作といった戦時期朝鮮における大和塾の活動は、社会の再編成・包摂にむけた国家の意志をむき出しに現しているという点で、解放後の朝鮮半島における国家と社会の関係を予兆するものであった。

おわりに

1938年７月に思想犯を思想戦に動員する目的で時局対応全鮮思想報国連盟が結成された。連盟は朝鮮人による自主的運営を掲げた。とくに総務や支部長を朝鮮人が務め日本人が総務次長

---

[144]『毎日新報』1943年６月15日（２）。
[145]『毎日新報』1943年６月４日（３）。
[146]『毎日新報』1943年７月９日（２）。
[147]『毎日新報』1944年６月２日（３）。
[148]『毎日新報』1941年12月24日（４）。
[149]『毎日新報』1942年７月18日（３）。
[150]『毎日新報』1943年５月１日（２）。
[151]緑旗連盟編『大和塾日記』興亜文化出版株式会社、1944年６月。

や副支部長としてこれを補佐する体制は、統監府期の次官政治あるいは満洲国の内面指導を連想させるが、戦時期に入って総督府官僚のなかで朝鮮人の割合が大きくなったこととも軌を一にする[152]。連盟は統治機構ではなかったが、保護観察所長が本部の総務次長、支部の副支部長に就くことが定められていた点で、純粋な民間機構でもなかった。

時局対応全鮮思想報国連盟の実験は非植民地化（decolonization）[153]の萌芽であったといえよう。朝鮮の植民地化の過程で統監府の次官政治が存在したように、非植民地化の過程でも類似した段階は必要であった。しかし、この試みは民族ヒエラルヒーの転覆という危機感を引き起こし、挫折した。その結果、周知のように朝鮮では順調な非植民地化は行われなかった。日中戦争期朝鮮の知識人たちは東亜協同体論を意識しながら一種の自治論に近い「協和的内鮮一体論」を提起したが、結局総督府によって圧殺されてしまった[154]。思想報国連盟の軌跡は協和的内鮮一体論の運命とも重なる。非植民地化の前兆が現われたが、すぐに踏みつぶされてしまったのである。思想報国連盟の実験は、戦時期朝鮮社会の一断面を示す挿話ともいえよう。

新しく登場した大和塾では、座禅による日本精神の体得が強調されるなど、思想犯の錬成に焦点が合わされた。理論よりは実践、イデオロギーよりは生活が重視された。「差別からの脱出」[155]として受けとめられ「傷ついた民族的自尊心を撫でる芳しい治療剤」[156]でもあった内鮮一体の政治が否定され、「道義朝鮮」[157]の確立が叫ばれるようになった状況に照応する変化であった。意欲的に出発した皇道精神修練会が二回で中断されたことからもわかるように、思想犯の錬成という初発の役割そのものが後景化する様子もうかがえる。総督府は、直接に社会や民衆との交渉を図った。そしてその接触面に国語講習会と授産が存在した。思想犯は農作業など授産に動員され、国語講習会の教壇に立たされた。朝鮮の知識人は、民族の指導者であることをやめ、一国民として生まれ変わることを要求された。

大和塾は女性教育、社会福祉など多様な社会活動を繰り広げ、文化人との合作を通して「国民音楽」「国民演劇」などを展開した。これは解放後の南北朝鮮における国家と社会の関係を予兆するものであった。総督府は、皇民化という一種の国民づくりの企図を社会の深部にまで届けようとした。戦時期の朝鮮社会は、植民地近代の極限であると同時に後植民地（postcolonial）社会の青写真だったのである。

1945年８月16日、日本の敗戦で興奮している朝鮮の民衆に向かって演説をする呂運亨をとらえた写真には長崎祐三が写っている。周知のように、終戦の直前から治安維持などをめぐって遠藤政務総監と呂運亨との間では交渉があり、両者の思惑が交錯するなかで呂運亨は朝鮮の非

---

[152] 橋谷弘「1930・40年代の朝鮮社会の性格をめぐって」『朝鮮史研究会論文集』27、1990年３月、参照。

[153] 20世紀とくに第１次世界大戦から1960年代にいたるまでは「非植民地化」の時代であった。植民地朝鮮は1919年の３・１独立運動をもって世界的な非植民地化の流れの先頭に立つことになる。1910年の「韓国併合」から1945年の解放にいたる歴史を、植民地帝国の解体や非植民地化というグローバルな変動のなかに位置付けることで、収奪と開発、植民地近代、「親日」と抵抗など矛盾に満ちた事象を理解するための新しい地平が開かれると期待する。

[154] 拙著『戦時期朝鮮の転向者たち―帝国日本／植民地朝鮮の統合と亀裂―』有志舎、2011年、参照。

[155] 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1982年、参照。

[156] パニャ・イサアッコブナ・シャブシナ（金明浩訳）『植民地朝鮮で―あるロシア知性が書いた歴史現場記録―』ハヌル、1994年、191頁（朝鮮語）。

[157]「民衆に対する指導力強化 道義朝鮮を顕現せよ 小磯総督 三千庁員に初訓辞」『毎日新報』1942年６月19日（１）。「道義朝鮮」は小磯国昭総督時代（1942年５月～1944年７月）を象徴するスローガンである。

植民地化のエージェントとして乗り出したのである。そして呂が大衆の前に初めて現れた際に保護観察所長兼大和塾会長の長崎祐三がその横に付き添ったことになる。しかしこの急な企画は総督府や呂運亨の意図を裏切って破綻した。朝鮮人の指導者も朝鮮人の団体も一切許さなかった総督府政策のつけが回ってきたのだといえる。

〈写真４〉1945年８月16日の呂運亨（中）と長崎祐三（左）[158]

1945年10月ないし11月、長崎は保護観察所の公金を朝鮮人の治安隊に渡した嫌疑で逮捕される[159]。1946年３月、京城地方法院は長崎に横領罪を適用し、懲役１年６か月を言い渡した。金を受けとった左翼勢力を牽制するための措置だったと考えられるが、新聞報道では「朝鮮解放運動を弾圧するためにあらゆる暴虐な手段を敢行した大和塾と保護観察所長」[160]に批判の焦点が絞られた。大和塾も糾弾の対象となった。米軍政下で設置された南朝鮮過渡立法議院の「附日協力者」規定では「民族精神に背反して日本帝国主義に迎合する目的で設立された政治的・経済的・社会的・文化的団体に関わった者」という条項を設け、その団体として緑旗連盟などとともに大和塾を挙げている[161]。

他方、治安維持法体制は1948年２月の国家保安法の制定でほぼそのまま引き継がれることになる。転向者の団体として国民補導連盟も結成されるが、朝鮮戦争勃発の直後に李承晩政権によって数万名の連盟員が虐殺される悲劇が起こった。民主化とともに1989年に社会安全法が撤廃されたことで、韓国の転向政策は公式的にはなくなったが、国家保安法そのものは相変わらず韓国社会を規律している。

参考文献

奥平康弘『治安維持法小史』筑摩書房、1977年。
宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1982年。
橋谷弘「1930・40年代の朝鮮社会の性格をめぐって」『朝鮮史研究会論文集』27、1990年３月。

---

[158] 李基炯『夢陽呂運亨』実践文学社、1984年、口絵。

[159] 水野直樹前掲「思想検事たちの「戦中」と「戦後」」488～489頁。

[160] 『ソウル新聞』1946年３月21日。

[161] 『東亜日報』1947年４月24日。４月22日の立法議院第57次本会議に上程された修正案の内容である。ただし、７月２日に確定した最終案では団体名は列挙していない。

池昇峻「1930年代日帝の「思想犯」対策と社会主義者たちの転向論理」『中央史論』10・11合輯、1998年12月（朝鮮語）。
黄敏湖「戦時統制期朝鮮総督府の「思想犯」認識と統制」『史学研究』79、2005年９月（朝鮮語）。
水野直樹「戦時期朝鮮における治安政策―「思想浄化工作」と大和塾を中心に―」『歴史学研究』777、2003年。
同「戦時期朝鮮の治安維持体制」倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争７ 支配と暴力』岩波書店、2006年。
同「思想検事たちの「戦中」と「戦後」―植民地支配と思想検事―」松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』思文閣出版、2009年。
水野直樹教授退職記念講演会「戦時期朝鮮の社会を読む―植民地研究と映画―」、2016年３月17日。
金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー―就学・不就学をめぐる権力関係―』世織書房、2005年。
永島広紀「日本統治下の朝鮮における転向者と思想「善導」の構図」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』12巻２号、2008年１月（同『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、2011年、所収）。
洪宗郁『戦時期朝鮮の転向者たち―帝国日本／植民地朝鮮の統合と亀裂―』有志舎、2011年。

The Thought Control Policy and the Yamato-juku in Colonial Korea

HONG Jongwook

In July 1938, the Korean Federation of Patriots（全鮮時局対応思想報国連盟）was established in order to mobilize Korean political prisoners charged with thought crimes into ideological warfare. The Federation promoted independent management by Koreans. In particular, a system in which Koreans could serve as general affairs and branch chiefs and Japanese could assist them as assistant general affairs and deputy branch chiefs was promoted, reminiscent of the vice minister politics（次官政治）during the time of Japanese supervision in Korea or the internal guidance（内面指導）of Manchuria by Japan. This experiment of the Federation was the impetus of decolonization（非植民地化）. A similar stage was required for the decolonization process, as there was the vice minister politics in the colonization process in Korea. However, this effort was frustrated because it triggered a sense of crisis that ethnic hierarchy was being overturned. As a result, decolonization in Korea did not go smoothly. Korean intellectuals during the Sino-Japanese War period raised the "theory of cooperative integration between Japan and Korea"（協和的内鮮一体論）, which was similar to a kind of self-governing theory, in awareness of the "theory of East Asian cooperative"（東亜協同体論）, but eventually it was overturned by the Governor General. The path of the Federation overlaps with the fate of the theory of cooperative integration between Japan and Korea. A precursor to decolonization emerged, but was immediately suppressed. The experiment of the Federation was an episode where a small piece of the Korean society during the war could be seen.

With the appearance of Yamato-juku（大和塾）, focus was placed on training political prisoners, such as the emphasis of the Japanese spirit by Zen meditation. Practice and life was more important than theory and ideology. This change was in response to the political situation where integration between Japan and Korea that was once accepted as "escape from discrimination" was now denied and the establishment of Moral Korea（道義朝鮮）became strongly vocal. The Governor General tried to negotiate directly with society and the people. And there were Japanese language classes（国語講習会）and vocational training（授産）on the contact surface. The political prisoners were mobilized for vocational training such as farm work, and forced to become teachers at Japanese language classes. Korean intellectuals were prevented from becoming national leaders and were forced to be reborn as Japanese citizens. Yamato-juku conducted various social activities, such as women's education and social welfare, and developed "national music, national plays" in collaboration with artists. This was a sign of the relationship between the state and society in the North and in South Korea after liberation. The Governor General sought to promote state building to the depths of society. Wartime Korean society was the extreme of colonial modernity and at the same time a blueprint of postcolonial society.